

# 平成22年度 第2回 太平洋スルメイカ長期漁況予報

## 今後の見通し（2010年10月～12月）

対象魚種：スルメイカ

対象海域：道東太平洋周辺海域、根室海峡～オホーツク海、常磐～三陸周辺海域、  
津軽海峡～道南太平洋周辺海域。

対象漁業：いか釣り、底曳網、定置網、まき網。

対象魚群：主に冬季発生系群（2010年級群）。

### 1. 道東太平洋周辺海域（いか釣り、底曳網）

- (1) 来遊量 : 前年並み。
- (2) 漁期・漁場 : 10月まで漁場が形成される。
- (3) 魚体の大きさ : 前年並み。

### 2. 根室海峡～オホーツク海（いか釣り、定置網）

- (1) 来遊量 : 前年を上回る。
- (2) 漁期・漁場 : 10月～11月が漁期の中心となる。
- (3) 魚体の大きさ : 前年並み。

### 3. 常磐～三陸周辺海域（いか釣り、底曳網、定置網、まき網）

- (1) 来遊量 : 前年を下回る。
- (2) 漁期・漁場 : 予報期間を通じて漁場となる。
- (3) 魚体の大きさ : 予報期間の前半は前年より小さく、後半は前年並み。

### 4. 津軽海峡～道南太平洋周辺海域（いか釣り、定置網）

- (1) 来遊量 : 前年並み。
- (2) 漁期・漁場 : 10月～11月が漁期の中心となる。
- (3) 魚体の大きさ : 予報期間の前半は前年より小さく、後半は前年並み。

## 漁況の経過（2010年7月～8月）および今後の見通しについての説明

### (1) 資源状態

太平洋海域で漁獲されるスルメイカは、冬季発生系群が主体であり、これに秋季発生系群の一部が混じると考えられている。太平洋海域における資源水準を漁獲量の動向から推測すると、1970年～1980年代は低位水準で推移した。1989年から増加に転じ、それ以降では1996年（年間漁獲量：276千トン）が最も資源水準の高い年となった（図1）。近年は高位から中位水準で推移しており、2007年の漁獲量はそれ以前に比べて大きく増加したが（144千トン）、2008年と2009年は109千～117千トンと横ばいであった。主漁場は常磐以北太平洋海域であり、道東太平洋周辺海域、根室海峡～オホーツク海、常磐～三陸周辺海域および津軽海峡～道南太平洋周辺海域に区別される。2009年10月～12月の常磐以北太平洋海域での漁獲量（生鮮）は54千トンであり、道東太平洋周辺海域では3千トン、根室海峡～オホーツク海では4千トン、津軽海峡～道南太平洋周辺海域では18千トン、常磐～三陸周辺海域では29千トンであった（図2）。なお、近年の漁獲量のピークは9月～11月である。

### (2) 関連調査結果

8月上旬～9月上旬に実施された第2次漁場一斉調査（北海道立総合研究機構函館水産試験場、岩手県水産技術センター、青森県産業技術センター水産総合研究所、宮城県水産技術総合センター；以下、一斉調査）および関連いか釣り調査（北海道立総合研究機構釧路水産試験場、岩手県水産技術センター）の結果（図3）、道東太平洋周辺海域（42° N 以北、143° E 以東）の平均 CPUE（いか釣り機1台1時間当り漁獲尾数）は5.63尾であり、前年（5.28尾）並みであった。三陸周辺海域（41° N 以南、143° E 以西）は2.16尾であり、前年（9.02尾）を下回った。津軽海峡～道南太平洋周辺海域（41° N 以北、143° E 以西）は3.45尾であり、前年（16.76尾）を下回った。全水域では3.12尾となり前年（9.45尾）を下回った。

### (3) 2010年の各海域の漁況経過（7月～8月、一部未集計）

2010年7月～8月における太平洋沿岸の主要港での水揚げ量（生鮮：各道県の速報値等の集計による）は25千トンで、前年（前年同期、28千トン）並みであった。各地域の詳細な漁況経過は、表1に示す。

### (4) 魚体の大きさ

・一斉調査で漁獲されたスルメイカの全調査点での外套背長組成は、モードが19cmにある単峰型の組成であり、前年（20cm）より1cm 小型であった。海域別では、道東太平洋周辺海域がモード19cm（前年：20cm）、三陸周辺海域がモード20cm（前年：19cm）、津軽海峡～道南太平洋周辺海域がモード18cm（前年：20cm）であった（図4）。

・7月～8月に北海道～宮城県で水揚げされたスルメイカの魚体組成は、概ね前年並みか小型個体の割合が高かった（表1）。

### (5) 今後の見通しの説明

・9月上旬現在での、北部太平洋海域における漁獲対象資源は、本年8月までの各地の漁獲状況から判断すると、一部の海域で前年を上回るものの概ね前年並みか下回る水準であると推測される。一斉調査での平均 CPUE は道東太平洋周辺海域では前年並み、三陸周辺海域および津軽海峡～道南太平洋周辺海域では前年を下回った。以

上のことから本予測期間である10月～12月における北部太平洋海域への来遊水準は、一部の海域を除き、概ね前年並みか下回ると予測される。

・道東太平洋周辺海域での漁獲対象資源は、太平洋沖合を北上する群が主体と考えられている。8月に北海道立総合研究機構釧路水産試験場が実施したいか釣り調査（以下、道東太平洋いか釣り調査）のCPUEは前年並み、道東主要港へ水揚げする小型いか釣り船のCPUE（1日1隻当り漁獲量）は前年を上回ったものの（表1）、8月～9月の道東太平洋マサバ・マイワシ漁期中調査（流し網）において道東沖で漁獲されたスルメイカのCPUE（流し網調査1回当たり漁獲尾数）は前年を下回った（北海道浮魚ニュース16号：北海道立総合研究機構釧路水産試験場）。以上のことから道東太平洋周辺海域に来遊するスルメイカは前年並みと予測される。なお、近年の道東太平洋周辺海域における漁獲量は11月には大きく減少するため、主漁期は10月で終了すると予想される。魚体の大きさは、一斉調査結果から前年並みになると考えられる。

・根室海峡～オホーツク海での漁獲対象資源は、太平洋沖合北上群が主体と考えられている。道東太平洋いか釣り調査における釧路以東でのCPUE、7月の国後島南の海面水温（函館海洋气象台資料）および8月までに道東主要港へ水揚げした小型いか釣り船の平均CPUEを説明変数とした一般化線形モデルによる漁獲量予測の結果から、根室海峡～オホーツク海に来遊するスルメイカは前年を上回ると予測される（北海道立総合研究機構釧路水産試験場資料、未発表）。根室海峡～オホーツク海への来遊量が多いため、例年より早く10月から漁場形成は本格化すると予想される。魚体の大きさは道東太平洋周辺海域での一斉調査結果から前年並みになると考えられる。

・常磐～三陸周辺海域での漁獲対象資源は、三陸～津軽海峡周辺海域に分布する群を主体に道東太平洋周辺海域から南下する群が加わると考えられている。8月～9月の三陸周辺海域における調査船のCPUE、7月～8月の小型いか釣り船のCPUE（1日1隻当たり漁獲量）は前年を下回った（表1）。道東太平洋周辺海域の来遊量は前年並みと予測されるものの、8月～9月の津軽海峡～道南太平洋周辺海域における調査船のCPUE、7月～8月の小型いか釣り船のCPUEも前年を下回った。以上のことから常磐～三陸海域の来遊水準は前年を下回ると予測される。近年、岩手県以南の12月の漁獲量は、11月の漁獲量を上回ることも少なくないため、予報期間を通じて漁場となると予想される。魚体の大きさは、一斉調査及び漁獲物の測定結果から、予測期間の前半は前年より小型個体が主体になるが、後半は前年並みになると考えられる。

・津軽海峡～道南太平洋周辺海域での漁獲対象資源は、道東太平洋周辺海域およびその沖合からの南下群が主体と考えられている。この群は津軽暖流の勢力減少にともなう水温低下とともに津軽海峡東口周辺海域から日本海に移動すると考えられる。調査結果ならびに現況から判断すると道東太平洋周辺海域への来遊量は前年並みと予測される。8月～9月の道東太平洋マサバ・マイワシ漁期中調査（流し網）において襟裳岬沖で漁獲されたスルメイカのCPUEは前年を下回った（北海道浮魚ニュース16号：北海道立総合研究機構釧路水産試験場）ことから、沖合からの加入は前年を下回ると推察される。10月以降における津軽暖流の東方への張り出しに関する予測情報がないため、津軽暖流の勢力については近年並みを仮定すると、スルメイカが津軽海峡東口周辺海

域において滞留する期間は前年よりも長いと考えられる。以上のことから津軽海峡～道南太平洋周辺海域の来遊水準は前年並みと予測される。津軽海峡～道南太平洋周辺海域における漁獲量は12月には大きく減少するため、漁期の中心は10月～11月と予想される。魚体の大きさは、一斉調査及び漁獲物の測定結果から、予測期間の前半は前年より小型個体が主体になるが、後半は前年並みになると考えられる。

表1. 漁況経過（2010年7月～8月、一部未集計）

	漁況経過
北海道 道東	8月の道東主要港（釧路港・十勝港）における釣り漁業による水揚げ量は、1,324トン（前年比373%）であった。CPUEは前年比149%であった。
北海道 道南	8月の函館港における釣り漁業による水揚げ量は159トン（前年比91%）、CPUEは前年比110%であった。釣りで漁獲されたスルメイカのモードは7月20cm（前年：19cm）、8月19cm（前年：20cm）、9月22cm（前年：22cm）で前年並みであった。日高支庁における釣り・定置網・沖合底曳網漁業による水揚げ量は630トン（前年比20%）であった。浦河港における釣り漁業による水揚げ量は593トン（前年比30%）、CPUEも前年比46%であった。
青森	8月の八戸港、白糠港への釣り漁業による水揚げ量は、それぞれ930トン（前年比63%）、345トン（前年比93%）であった。CPUEは八戸港では前年比64%であったが、白糠港では88%であった。八戸港へのまき網漁業による水揚げ量（7,820トン）は、前年（6,207トン）を上回った。大畑港への釣り漁業による水揚げ量は260トン（前年比114%）であり、CPUEは前年比87%であった。
岩手	8月の主要7港における釣り漁業による水揚げ量は676トン（前年比37%）、定置網漁業による水揚げ量は326トン（前年比58%）であった。定置網で漁獲されたスルメイカのモードは22cmであり、前年（23cm）よりも小型であった。
宮城	8月の主要10港における底曳網漁業による水揚げ量は6トン（前年比29%）、定置網漁業による水揚げ量は51トン（前年比204%）であった。釣り漁業による水揚げ量は562トン（前年比87%）、CPUEは前年比93%であった。底曳網で漁獲されたスルメイカのモードは18cmで、前年（13cm）より大型であった。
福島	8月の全漁港における釣り漁業による水揚げ量は0.2トン（前年比42%）、CPUEは前年比84%であった。
茨城	6月の主要港における沖合底曳網漁業による水揚げ量は7.1トン（前年比571%）、小型底曳網漁業による水揚げ量は8.3トン（前年比227%）であった。CPUEはそれぞれ前年比366%、294%に増加した。なお、7月～8月は底曳網漁業の禁漁期間である。
千葉	7月の主要港における定置網漁業による水揚げ量（12トン）は、前年（7トン）を上回った。釣り漁業による水揚げ量（91トン）は、前年（7トン）を上回り、CPUEも前年比219%であった。

表1の続き

神奈川	8月の主要2港における定置網漁業による水揚げ量は2キロ（前年比3%）、釣り漁業による水揚げ量は2トン（前年比143%）であった。
静岡	8月の主要港における釣り漁業による水揚げ量（11トン）は、2009年（20トン）を下回り、CPUEも前年比62%に減少した。
三重	8月の主要港における中型まき網漁業による水揚げ量は7トン（前年比117%）であった。 8月に中型まき網で漁獲されたスルメイカのモードは18cmで、前年（21～22cm）より小型であった。
和歌山	8月の主要2港における釣り漁業による水揚げ量（17トン）が、2009年（11トン）を上回った。
高知	8月の主要3港における釣り漁業による水揚げ量（16トン）が、2009年（27トン）を下回った。

注：CPUEは1日1隻当たり漁獲量

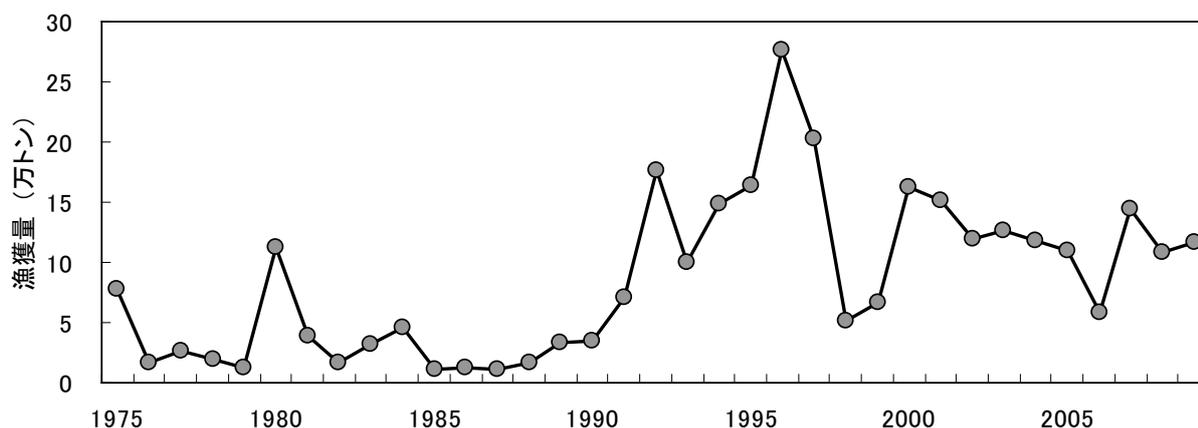


図1. 太平洋におけるスルメイカの年別漁獲量の推移  
(集計値は暦年)

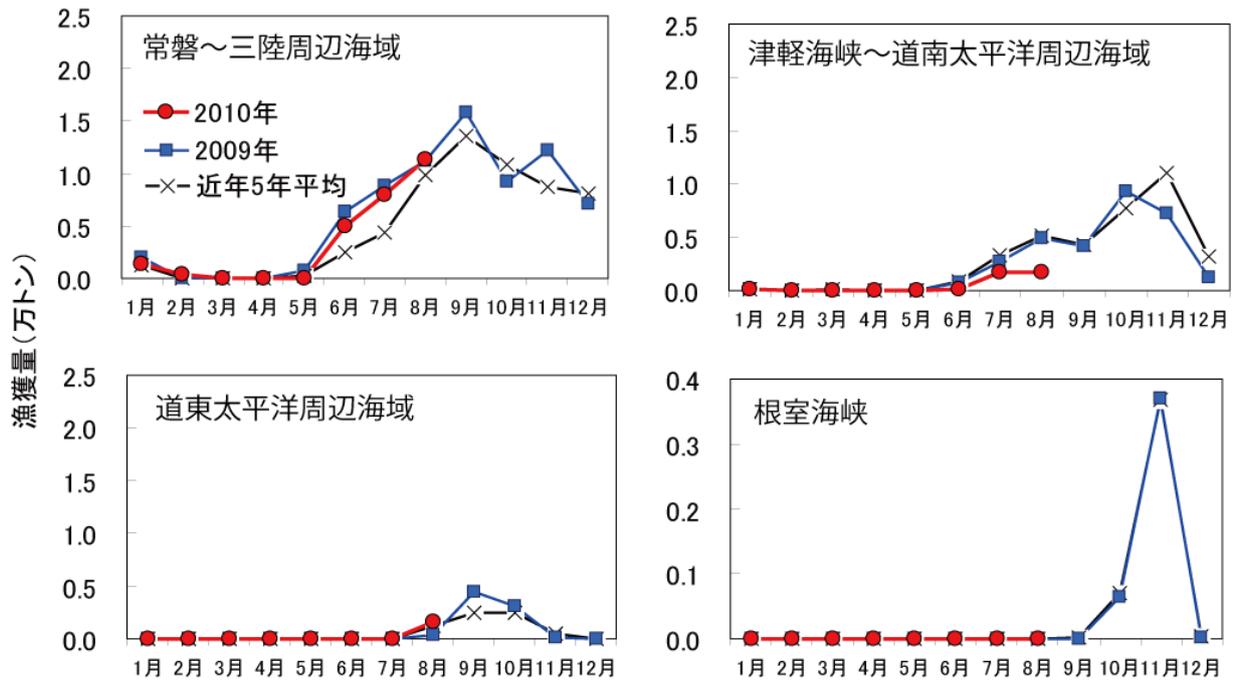


図2. スルメイカ月別海域別漁獲量（生鮮）  
 近年5年は2005年～2009年  
 （釣り・底曳網・定置網・まき網）

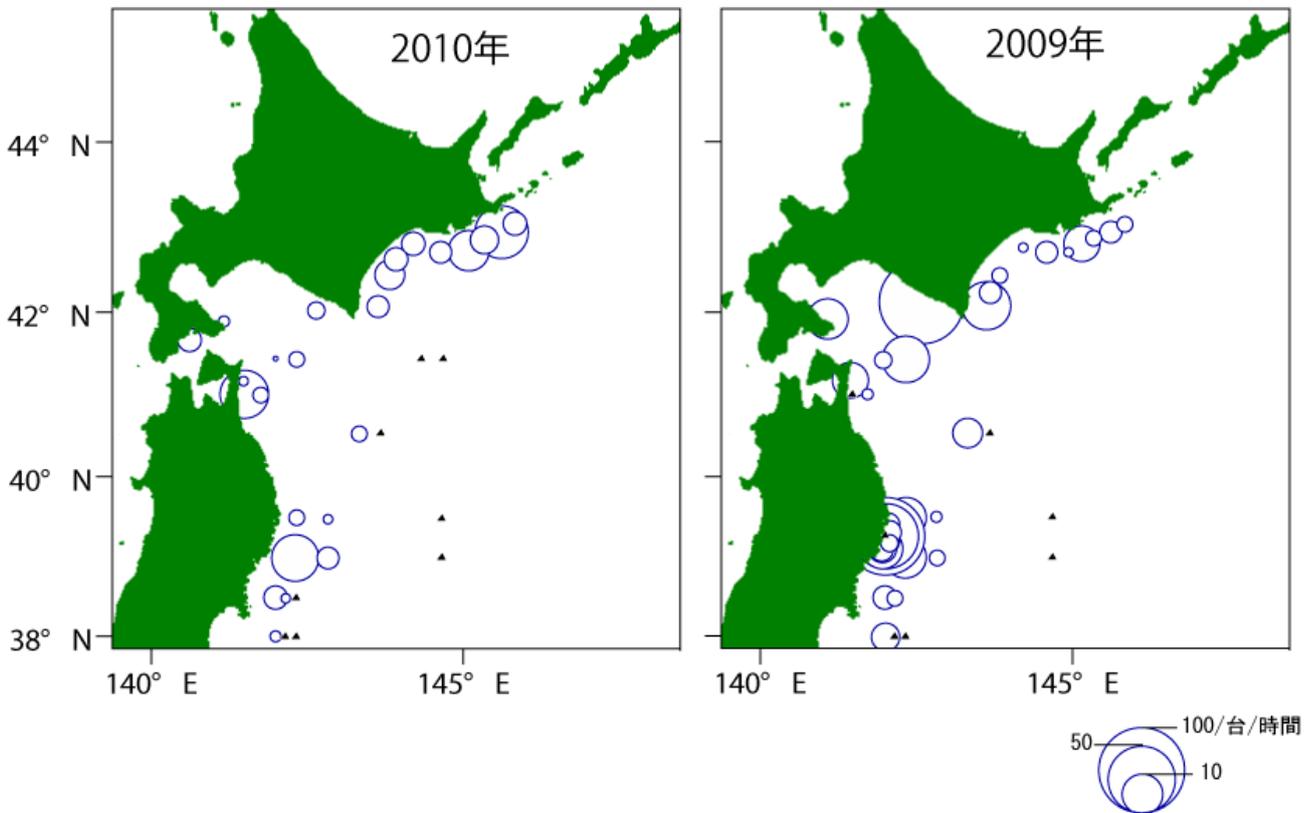


図3. 2010年と2009年の第2次漁場一斉調査および関連調査（8月～9月）における  
 いか釣り調査点とCPUE（釣機1台1時間当たり漁獲尾数）、▲は漁獲なしの調査点

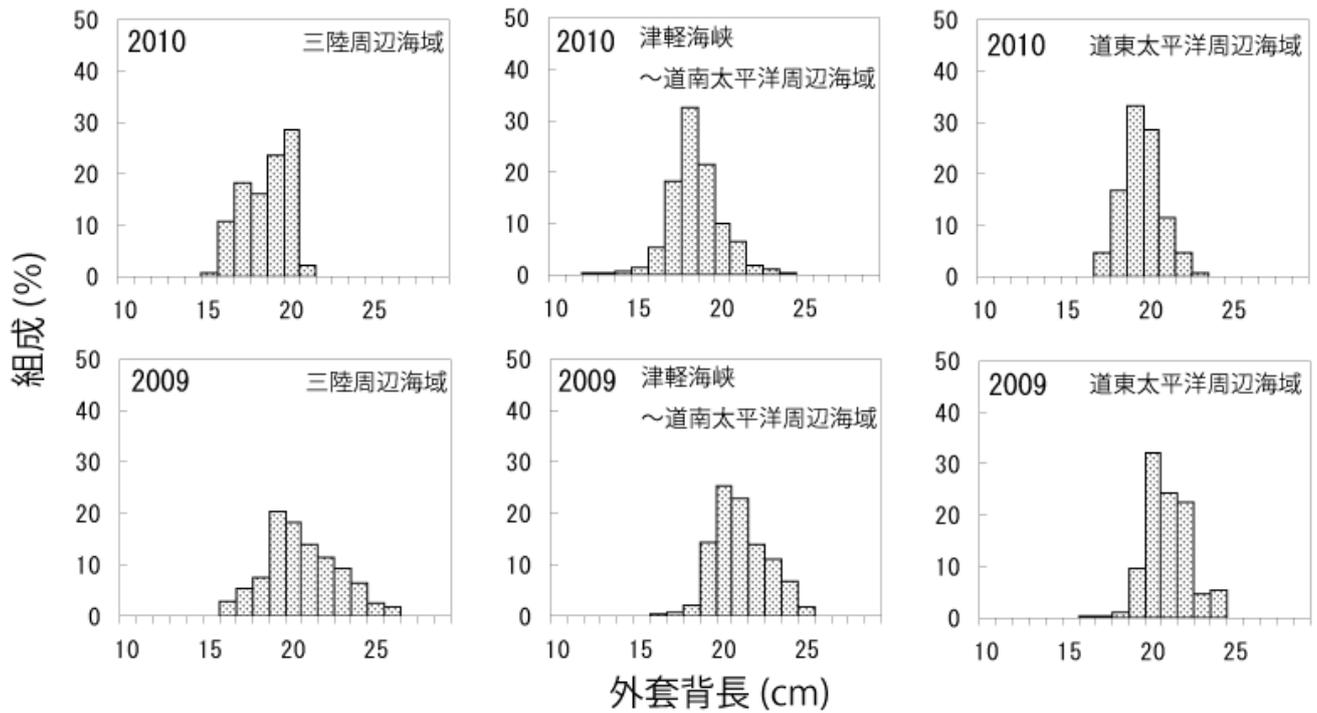


図4. 第2次漁場一斉調査による外套背長組成

(参考)

北海道西部海域（10月～12月、日本海）における漁況予報

1. 道北・道央（小型いか釣り）
  - (1) 来遊量・漁況：前年および近年平均を下回る。
  - (2) 漁期・漁場：10月以降は前年並み。
  - (3) 魚体の大きさ：近年平均並み。
  
2. 道南・津軽（小型いか釣り）
  - (1) 来遊量・漁況：前年並みで近年平均を下回る。
  - (2) 漁期・漁場：11月も前年並みに漁場が形成される。
  - (3) 魚体の大きさ：近年平均並み。

## 参 画 機 関

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構 釧路水産試験場 函館水産試験場	三重県水産研究所
地方独立行政法人 青森県産業技術センター 水産総合研究所	和歌山県農林水産総合技術センター 水産試験場
岩手県水産技術センター	高知県水産試験場
宮城県水産技術総合センター	社団法人 漁業情報サービスセンター
福島県水産試験場	水産庁 増殖推進部 漁場資源課
茨城県水産試験場	独立行政法人 水産総合研究センター 北海道区水産研究所
千葉県水産総合研究センター	東北区水産研究所
神奈川県水産技術センター	日本海区水産研究所
静岡県水産技術研究所	